

「一日一步」を着実に

上うえ廣ひろ榮えい治じ

明けましておめでとうございます。

いよいよ我が実践倫理宏正会が創立七十周年を迎える年となりました。おりしも今年は四年に一度の閏年。一年がいつもの年より一日多い三百六十六日です。たかが一日ですが、されど一日。たとえ一日といえども、増えることに対しては、人の思いはそれぞれです。

五千円札でお馴染みの、教育者で思想家の新渡戸にとべいなぞう稲造博士は、著書『一日一言』の二月二十九日の項で、「この一日を仕事をする人は損をしたと思うし、商売をする人は得をしたという。同じ一日がこのように正反対なのは、日々の仕事を自分のものと思うか否かによるものである」と述べ、宝井たからい其角きかくの俳句「我が雪と 思へば軽し 笠の上」を添えています。

手に持った銘酒も人のものであれば重く思うし、自分のものなら軽く思う。辛い仕事はやりたくないが、人に喜ばれる仕事ならやり甲斐がある。ことほど左様さように、人は誰でも心の持ちようひとつで感じ方は変わってきます。

同じ仕事でも嫌々すれば、つまらない「雑用」になってしまいますが、心を込めてする仕事はどんな小

さな仕事でも、やり甲斐のある仕事になります。掃除も、お茶汲みも、コピー取りも、嫌々するか、心を込めてするかで、その仕上がりに違いが出ます。心の持ちようひとつで、人生は楽しくも、つまらなくもなるのです。

たかが一日とはいえ、私たちにとっては「我も人もの仕合わせ」を目指して実践する大切な一日です。その一日を「いい一日」にできるかどうか、実践者にとっては真剣勝負です。一年は一日一日の積み重ねだからです。

「いい一日」とは、今日できることをしっかりとやり遂げることでできた一日です。心が愛和の思いで満たされた一日であり、明日につながる一日です。

いまから五十年ほど前、歌手の水前寺清子すいぜんじきよこさんが歌って大ヒットした歌があります。「ワン・ツー、ワン・ツー」という威勢のいい掛け声で始まり、親しみやすいメロディーと明るいマーチのリズムが心地よい「三百六十五歩のマーチ」です。今でもテレビの懐メロ番組などで歌われるので、若い方もご存じだと思います。

この歌詞を書いたのは、五年ほど前に八十五歳で亡くなった作詞家の星野哲郎ほしのてつろうさんです。「私 生まれも育ちも葛飾柴又です」という台詞せりふで始まる「男はつらいよ」の作詞家といえ、おわかりかと思えます。星野さんは戦後日本を代表する作詞家の一人で、水前寺清子さんをはじめ都みやこはるみさん、北島三郎さんなど何人もの演歌歌手を育て、亡くなるまでの五十年間に五千曲近い作品を遺したといわれます。

詞を作るにあたっては、「歌はすべて人生の応援歌」というのが星野さんの哲学で、歌手を育てるにあたっては、「一日を一生と思え」が口癖だったそうです。この「三百六十五歩のマーチ」は、まさにその

思いが凝縮された作品でした。

星野さんと水前寺さんが出会ったのは、彼女が十五歳のときに出場した全国歌謡コンクールにおいてでした。このとき二位に入賞した彼女の才能を認めた星野さんは、なんとか歌手デビューさせようとするもののなかなかうまくいかず、三年間でレコーディングされた歌十一曲のすべてがお蔵入りになったといいます。チャンスは二人が所属するレコード会社を移ったときに訪れました。星野さんの渾身の曲「三百六十五歩のマーチ」ができたのです。

しかし水前寺さんは、この曲を歌う気持ちになれなかったといえます。マーチですから行進曲のリズムで、しかも「ワン・ツー、ワン・ツー」の掛け声で始まる歌は、今まで親しんできた演歌とは異なります。日本人の心を歌う演歌歌手になるという自分の目標とはかけ離れた歌のように思えたからです。

星野さんは愛弟子の拒否にがっかりします。見かねたディレクターのすすめで、水前寺さんは気乗りがしないまま歌うことにします。そのときふと、彼女は星野さんの「一日を一生と思え」「この一瞬は、二度と戻らないのだから命懸けでやれ」という言葉を思い出し、歌詞の一部に自分流のこぶしをつけて演歌調で歌いました。その場にいた人たちは拍手喝采、大ヒット曲誕生の瞬間でした。

私もこの歌を初めて聴いたとき、私たち実践者を応援している歌ではないかと思いました。一番の「一日一步 三日で三步 三步進んで 二歩さがる」は、二歩さがっても一步前進で、けっして後退ではありません。二番の「百日百歩 千日千歩 ままになる日も ならぬ日も」は、「朝の誓」を思いどおりでできる日もあれば、できない日もあること、そして「あしたのあしたは またあした」とあくまでも前向きに、実践を励ましてくれてるように感じたのです。

星野さんが作詞する際、「人生の応援歌」にこだわったのには理由があります。自分自身の来し方もけつして平坦なものではなかったからです。

山口県の周防大島出身の星野さんは、瀬戸内海を行き来する船を見て育ち、幼い頃から船乗りに憧れていました。そのため商船学校に進みましたが、在学中に結核を患い、卒業が遅れます。それでも望んでいた遠洋漁船の乗組員になることができました。しかし二年後、再び結核を発症し、郷里に戻って闘病生活を余儀なくされたのです。

失意の闘病生活を励ましてくれたのは、後年、夫人となる遠縁の娘さんでした。やがて彼女は東京の会社勤めになり、その後は手紙で星野さんを励ましました。二人の手紙のやりとりは、二年間で三百通にもなったといえます。

星野さんは、五十年も作詞家稼業をしていると、人の心の機微が時代とともに変わってきたことを痛感すると語っています。今では人の情けを歌っても、その思いはなかなか人の心に届かないといえます。しかし、どのような時代になっても、古びることも変わることもない気持ちはある。それが人を思いやり、生きることを励ます心だと星野さんはいうのです。だから、星野さんが作ったどの歌詞にも、その思いが底流に流れているのです。その思いこそ、私たちの実践の基本である「愛和」の心でもあるのです。「三百六十五歩のマーチ」は「仕合わせ」に向かって歩く人への応援歌です。その道はけつして平坦な道ではないけれど、「千里の道も 一歩から」始まることを共に信じて、歩んで行こうと呼びかけます。

創立七十周年の節目のこの一年、ぜひ「一日一歩」ずつ着実に、会友みなで愛和の心を育みながら、倫理の実践に励んでいきたいと思えます。